

原 著

青年期ノ肺結核ニ關スル研究 (第二報)

青年期肺結核ノ豫後

北海道帝國大學醫學部第一內科教室

教授 有 馬 英 二

講師 山 田 豐 治

肺結核ノ死亡統計表中 20 歳乃至 25 歳ノ年齢ガ曲線ノ頂點ヲ爲スハ各國共通ノ事實ナリ、就中男子ハ 21 歳ニ於テ女子ハ 19 歳ニ於テ最高ニ達ス、此ノ事實ニ鑑ミルモ青年期ノ結核ガ如何ニ豫後不良ナルカヲ推察スルニ足ルモノアリ、然乍此ノ事實ハソノ反面ニ於テ人類ガ如何ニ多ク青年期ニ結核ニ罹患スルカノ鏡像ニ外ナラザルモ、死亡數ヲ以テ直チニ青年期結核ノミノ豫後トハ斷ジ難ク或ハ小兒期初感染ノ末期モ此レニ加ハル可ク又多數罹患中ニハ壯年期ニ延長スルモノモアルベシ。

最近獨逸及北米合衆國ニ於テモ學齡兒童ノミナラズ中等學校專門學校大學等ノ生徒及學生ノ結核診斷頓ニ盛大トナリ所謂健康青年中ノ無症候性結核ニ就イテ研鑿スルモノ愈々加ハルノ趨勢ヲ見ル (Kattentidt, Kayser-Petersen, P. Krause, Wiewiorowski, Hetherington, Opie, Landis, Mc Phedran usw.)。

我邦ニ於テハ結核感染率ノ調査ニ就イテノ報告ハ漸次増加スルノ傾向アルモ青少年ノ結核像ニ就イテ殊ニ其ノ經過ノ追及ト豫後ニ關スル研究ハ未ダ記載セラレタルモノナシ。

余等ハ曩ニ (昭和 4 年 6 月) 札幌中等學校某々校ノ結核早期診斷ヲ施行シ所謂健康生徒ノ結核像ニ付テ發表セリ (結核第 10 卷第 5 號)。即チ、年齢

13 歳ヨリ 28 歳迄ノ主トシテ成熟前期ニ於ケル者 976 名ノ「レントゲン」検査ニ於テ 181 名ノ胸部所見アルモノ (但シ陳舊性初感染群ヲ除ク) ヲ得タルガ中胸内淋巴腺腫脹及肺門影腫脹 86 名、早期浸潤及其ノ續發症狀 33 名、血行性播種性結核 54 名、其他 8 名ナルコトヲ報ジソノ各型ニ付テ殊ニ早期浸潤型ニ付テ詳述セリ、是等ノ中數名ハ進行性傾向アルモノトシテ或ハ休學靜養ヲ勸告シ或ハ直チニ入院治療ヲ受ケシメタルモ、其ノ觀察ハ數ヶ月ニ止マリ其ノ後ノ經過ニ付テ知ル事ヲ得ザリキ。

昭和 8 年 9 月其ノ經過ニ付テ知ラントシ學校當局者ニ相諮リ居所ヲ調査シ其ノ判明セルモノニ書面ヲ以テ健康狀態ヲ照合セル結果ハ不明 61 名ヲ除キ 120 名ニ付キ現狀ヲ知ルコトヲ得タリ。

此レヲ表示スレバ次ノ如シ。

即チ病的所見アリシモノ 181 名中 15 名ハ在學中既ニ「病氣退學」セシモノニシテ其ノ病名ニ付テハ詳細ヲ知ルコトヲ得ザルモ恐ラクハ結核性疾患ノ爲メト推察セラル、内胸内淋巴腺腫脹 3 名、早期浸潤 6 名、血行性播種性結核 6 名ヲ算ス。

目下「病氣中」ノ報ヲ得タルモノ 6 名アリ症狀ノ程度モ記載不十分ナルヲ以テ詳細ニ知ルコト能

「レントゲン」 所見	胸内 淋腺 腫脹 肺門影 腫脹	肺 内 所 見											總 計				
		早期浸潤及其續 發症狀					血 行 性 播 種 性 結 核				其他ノ 病竈 (肺門周 圍浸潤、 淋巴道性 結核、新 鮮初感染)						
		新 鮮	軟 化 期 融 空 洞	早 進 行 傾 向	治 癒 傾 向	小 計	肺 又 ハ 上 (中) 野 播 種		慢 性 粟 粒 結 核	小 計	其 他						
							片 側 性 新 進 行 性	兩 側 性 新 進 行 性			小 計	其 他					
壯 日 常 生 活 ニ 差 支 ナ シ (治癒、輕快、不變)	51 (86.4%)	4	1	2	4 (52.4%)	3	8	3	1	4	19 (55.9%)	5 (83.3%)	35 (57.4%)	86 (71.7%)			
健 康 不 勝 (不 變、 増 悪)	2 (3.4%)	1		1	2 (9.5%)		1		1		2 (5.9%)		4 (6.6%)	6 (5.0%)			
病 氣 中 惡 (増)	2 (3.4%)			1	1 (4.8%)		1	1	1		3 (8.8%)		4 (6.6%)	6 (5.0%)			
死 亡	4 (6.8%)	2	2	2	1 (33.3%)	7	1	2	2	1	1	2	10 (29.4%)	1 (16.7%)	18 (29.5%)	22 (18.3%)	
計	59	7	3	4	7	21	4	2	12	4	3	7	2	34	6	61	120
不 (内 病 氣 退 明 學)	27 (45.9%)	2	5 (3)	4 (1)	1 (2)	12 (6)	2 (2)	11 (1)	2 (2)	3 (3)	1 (1)	20 (6)	2	34 (12)		61 (8.31)	
總 計	86	9	8	8	8	33	4	4	23	5	5	10	3	54	8	95	181

ハザルヲ遺憾トシ、此レニ屬スルモノ胸内淋腺腫脹2名、早期浸潤ニテ當時治癒傾向ト認メシモノ1名、肺ニ比較的限局セル播種性結核アリシモノニテ片側ナリシモノ1名、兩側性ニテ進行性ト思ハレシモノ及治癒性ト思ハレシモノ各1名ヲ算セリ。

又「健康不勝」トノ報ヲ爲セシモノモ120名中6名(5%)ニ及ブ、内胸内淋腺腫脹2名、早期浸潤中新鮮ノモノ及治癒傾向ノモノ各1名、血行性播種性ニテハ片側1名、慢性粟粒結核1名ナリ。

120名中4年8ヶ月ノ經過中死亡セルモノ22名(18.3%)ノ多キハ實ニ驚嘆ニ値スト言フ可シ、其ノ中10名ハ血行性播種性ニテ1名ノ慢性粟粒結核ヲ除ク9名ノ中、5名ハ片側性、4名ハ兩側性ナリ、又早期浸潤ト診斷セシモノニ7名ノ死亡ヲ生ゼシガ新鮮ナルモノ、早期空洞、進行傾向等各2名、治癒傾向1名ナリ、胸内淋腺結核ハ4名ナリキ。

日常生活上自覺的症狀ナク「壯健」ナリト報ゼシモノ86名、即チ全數(120名)ノ3/4弱(71.7%)ニ達ス、此レヲ診斷當時ノ所見ニ照合スルニ胸内淋腺腫脹51名(86名ニ對シ59%)早期浸潤及其ノ續發症11名(13%)血行性播種性結核19

名(22%)其他(肺門周圍浸潤等)5名(5.8%)ナリ。

今各病型ニ付テ觀察スルニ余等ガ當時胸内淋腺腫脹及肺門影腫脹(増大)ト診斷セシモノ16名ナリシモ病氣退學3名、居所不明等ニテ確報ヲ得難キモノ27名ヲ除キ59名ニ付テ觀ルニ中壯健ハ51名(86.4%)健康不勝又ハ病氣中4名(6.8%)死亡4名(6.8%)ニシテ大多數ハ健康者トシテ日常生活上異狀ナキモノ約14%ハ不健康ヨリ死亡ノ間ノ状態ニ在リ、死因不明ナル爲メ即斷ヲ容シ難キモノ4ケ年8ヶ月ノ經過中約7%ノ死亡率ヲ示セルハ實ニ注目ニ價スルモノト言フ可シ、以上胸内淋腺及肺門影腫脹中豫後不良ナリシモノハ8名ノ當時ノ「レントゲン」寫真ニ付イテ檢討スルハ興味深ク且緊要ナルコト、信ズ。

「健康不勝」 2名

第1例、XXXXXXXXXX 當時19歳、マントウー氏反應(+), 診斷、左側肺門腺結核。

「レ」線所見、兩肺門殊ニ左方甚ダシク膨大シ境界不銳利、右方稍々鮮明ニシテ均等性ナリ。肺野ニ異常ナシ。

返信、肺炎「カタル」及肋膜炎ヲ罹患セリト。

第2例、XXXXXXXXXX 當時18歳、マントウー(+),

診断、兩側肺門腺腫脹。

「レ」線所見、兩側肺門拇指頭大、濃影ヲナスモノ不整形、内ニ數多ノヨリ濃キ部分アリ。

返信、時ニ體溫 37 度ヲ越ユト。

「病氣中」 2 名。

第 1 例、■■■■ 當時 18 歳、マントウ (+)、診断、兩側肺門腫脹。

「レ」の所見、兩側肺門球狀ニ腫大スルモ大キ索狀影ノ交叉ニヨリ成立スルガ如シ、肺野ニ異變ヲ認メズ。

第 2 例、■■■■ 當時 23 歳、マントウ (+)、診断、兩側肺門腫脹。

「レ」の診断、兩側肺門不正形ニ稍々球狀ニ腫大シ中ニ太キ索狀影不規則ニ見ユ、肺野ニ異常ナシ。

「死亡」 4 名。

第 1 例、■■■■ 當時 21 歳、マントウ (++)、診断、右側副氣管腺結核。

「レ」線所見、右副氣管腺小鶏卵大ニ腫脹シ均等性濃影ヲナス、肺野到ル處ニ大小不同ノ粟粒大又ハ「レンズ」豆大ノ濃斑點狀陰影アリ。

昭和 4 年 11 月 5 日腦膜炎ニテ死亡。

第 2 例、■■■■ 當時 18 歳、マントウ (+)、診断、右側肺門腺腫脹、

「レ」の所見、右肺門下部ニ當リ 50 錢銀貨大境界稍々鋭利ナル圓形薄影アリ、内部ニ濃淡異ナルレトコロアリ。

昭和 6 年 1 月 10 日死亡、病名、左側上葉浸潤。

第 3 例、■■■■ 當時 19 歳、マントウ (++)、診断、右側肺門及副氣管腺結核。

「レ」所見、右肺門及氣管ノ右側ニ於テ小杏實大ノ濃影腫瘍狀ニ腫脹セルヲ見ル。

後當科ニ入院ス、兩側慢性血行性播種性結核トナリ、昭和 4 年 8 月 16 日死亡ス。

第 4 例、■■■■ 當時 16 歳、マントウ (++)、診断、兩側肺門腺腫脹、右側副氣管腺結核及右側肋膜肥厚。

「レ」所見、兩側肺門部殊々左側ハ著シク腫大シ境界鮮明、右副氣管腺ハ鳩卵大腫脹均等性陰影ヲナス、右側肋膜内葉肥厚シ胸壁ニ沿ヒテ肺尖ニ達シ、下方肋膜腔ハ潤濁ス、右横隔膜上方ニカナリ濃厚ナル不均等性陰影アリ、2 肋間ニ互ル。

早期浸潤及ソノ續發症例ハ總計 33 名ナリシガ中途退學 6 名ノ多キニ及ビ而シテ此退學者ノ

中早期空洞ハ 3 名、周圍ニ娘病竈ヲ生ジ進行性ト見做サレシモノ 1 名、結締織増殖ニヨル治癒傾向ヲ示セシモノ 2 名ナリキ。

現狀ノ確實ナルモノ 21 名ニ付テハ健康 11 名 (52.4%) 健康不勝 2 名 (9.5%) 病氣中 1 名 (4.8%) 死亡 7 名 (33.3%) ナレバ豫後憂慮スベキ (不健康及病氣中) 3 名ト死亡 7 名ヲ加算スレバ 10 名ノ多キニ達スルガ故ニ本症型ノ豫後ハ甚ダ不良ナリト言フヲ得可シ。

新鮮ナル早期浸潤即チ陰影均等性境界鋭利ナル圓形又ハ橢圓形ヲ呈セルモノ 7 名中 4 名ハ目下壯健ニ屬スルガ故ニ恐ラクハ吸收治癒セシカ或ハ不變ニ殘存スルモノト考ヘラル、1 名ノ健康不勝ハ如何ナル狀態ナルカヲ知り得ザルモ増悪セシモノニ非ザルカ、死亡 2 名ハ急激ニ増悪シ軟化融合シ肺癆ニ進展セシモノト考フルヲ至當トセン、早期空洞 3 名中ノ 2 名、進行傾向 2 名及治癒傾向ト認メシモノ 1 名モ亦以上ノ如キ肺癆性進展ニ終リ死亡セシモノナリ。

次ニ當時ノ「レントゲン」像ニ付テ記載スレバ、壯健 11 名

「健康不勝」 2 名。

第 1 例、■■■■ 當時 14 歳、マントウ (+)、診断、治癒性早期浸潤。

「レ」所見、右鎖骨下方外ニ於テ境界不鮮明ナル蠶豆大ノ薄影アリ、内外兩方ニ向ヒ索狀ニ移行シ大體網狀影ノ集合像ヲ呈ス。

昭和 7 年 7 月病氣退學、肺門炎、肺尖「カタル」、盲腸炎等ヲ經過ス。當今時々微熱、惡寒、頭痛倦怠感ヲ訴フ、膿性喀痰モ出ズルト。

第 2 例、■■■■ 當時 18 歳。

診断、右側新鮮早期浸潤。

「レ」所見、右下胸壁ニ接シ梅桃實大境界鋭利ナル均等性薄影存在ス。

検査後間モナク肋骨「カリエス」ヲ患ヒ手術ヲウケタルモ目下壯健ニ感ズト。

「病氣中」 1 名、■■■■ 當時 15 歳、マントウ (++)、診断、左側灰化性圓形浸潤。

「レ」所見、左下方心尖ニ近ク拇指頭大境界鋭利ナル多少顆粒狀ヲナス濃影 1 個存在ス。

昭和8年3月事故退學。

現狀報告、其後不健康、羸瘦、倦怠、食慾不振、盜汗、咳嗽、粘液性咯痰アリ、熱ナキモ感冒ニ罹リ易シト。

「死亡」7名。

第1例、 當時17歳、マントウー(++)、診断、左側新鮮早期浸潤。

「レ」所見、左側鎖骨下ニ胡實大均等性濃影アリ、他肺野ニ異常ヲ認メズ。

昭和6年8月14日死亡。

第2例、 當時19歳、マントウー(+)、診断、右側新鮮早期浸潤。

「レ」所見、右側第二肋間ニ梅實大均等性濃影アリ。

第3例、 當時19歳、マントウー(+++)、診断、右側鎖骨下浸潤兼轉移。

「レントゲン」所見、右鎖骨下ニ杏實大多少均等性濃影アリ周圍ニ多數ノ粟粒大結節影集團ス。

昭和4年8月5日死亡、我内科ニ入院右側人工氣胸後咯血ヲ來シ急激増悪死亡ス剖檢ナシ。

第4例、 當時19歳、マントウー(++)、診断、早期浸潤及轉移。

「レントゲン」所見、左側鎖骨下ニ50錢銀貨大均等性濃影ヲ見其ノ下方ニ集團性結節影多數アリ。

第5例、 當時15歳、マントウー反應(+)、診断、右肺尖(癥痕性)浸潤。

「レントゲン」所見、右側肺尖ニ小結節集團ヨリ成ル不正形薄影アリ肺尖肋膜著明ニ肥厚ス、右肺門腫瘍狀ニ腫脹シ濃厚ナリ。

昭和9年死亡。

第6例、 當時15歳、マントウー(+)、診断、右側早期空洞兼轉移。

「レントゲン」所見、右下野中央ニ約橢圓形扁桃大空洞アリ壁多少厚シ、周圍ニ粟粒大結節影集團ス。猶左側肺尖ニモ小結節多數密在ス。

昭和8年7月22日死亡。

第7例、 當時17歳、マントウー(++)、診断、右側肺尖早期浸潤(融合)。

「レントゲン」所見、左肺尖ニ梅實大多少不均等性濃影アリ、肺下葉ニ小結節集團ス。

昭和4年9月退學、同年12月22日死亡。

血行性播種性結核、34名中、壯健19名(55.8%)健康不勝2名、(5.8%)病氣中3名、(8.8%)死亡10名(23.4%)ナリ、檢診當時ハ54名ヲ算

シタルモ後病氣退學6名アリ。

「健康不勝」2名。

第1例、 當時16歳、マントウー(+)、診断、右側上葉稠密性纖維性結核。

「レントゲン」所見、右側肺尖ヨリ第三肋骨ニカケテ著明ナル網狀影アリ肺門ニ連ナル鎖骨下ニ於テ多少大ナル融合性斑點ヲ作ル、肺門兩側共ニ腫大ス。

第2例、 當時20歳、マントウー(++)、診断、慢性粟粒結核。

「レントゲン」所見、兩肺全般ニ多數ノ粟粒大結節狀陰影ヲ認め就中左肺ニ多數ナリ、而シテ肺尖及鎖骨下ニ於テハ融合スルヲ見ル。

「病氣中」3名。

第1例、 當時18歳、マントウー(+)、診断、兩側上葉播種性結核。

「レントゲン」所見、兩側上野ニ少數ノ粟粒大ノ結節狀陰影アリ左側外方ニ於テ多少集團ス。

第2例、 當時18歳、マントウー(+++)、診断、左側肺尖増殖性結核兼右側後期圓形浸潤。

「レントゲン」所見、左側肺尖ヨリ鎖骨下ニカケテ肺門ニ向ヒテ三角狀ヲナセル陰影アリ、肺尖及鎖骨下ニ於テハ豌豆大又ハ蠶豆大ノ斑點ヲ形成スルモ其ノ周圍ニハ粟粒大結節明カニ認めラル、右肺下野ノ上部外側ニ梅桃實大ノ圓形薄影アリ境界銳利ナリ。

第3例、 當時22歳、マントウー(+)、診断、左側上葉纖維性肺結核。

「レントゲン」所見、左肺上野ニ肺尖ヨリ肺門ノ高サニ互リテ纖維性網狀陰影アリ鎖骨下ニ於テ境界不鮮明ノ斑點狀ヲナス、右肺上野ニ於テモ肺紋理多少著明ナリ。

尙回答書ニハ其後腰椎「カリエス」及左側足關節炎ヲ患ヒタル旨記載セラル。

「死亡」10名。

第1例、 當時15歳、マントウー(++)、診断、慢性粟粒結核。

「レントゲン」所見、全肺ニ粟粒大斑點狀陰影アリ上方ハ下野ヨリモ多數ナリ、肺門腺腫脹ヲ見ズ。

昭和4年9月2日死亡。

第2例、 當時19歳、マントウー(+++)、診断、左側肺尖結核(癥痕性)。

「レントゲン」所見、左側肺尖ヨリ第一肋間ニカケテ多數小結節集團シ、猶小輪狀影連續シテ索狀ヲ呈ス

ルモノ肺尖ヨリ左側肺門ニ連ナル、左側肺門著明ニ腫大シ濃厚ナリ、右側肺尖ヨリ鎖骨下ニ及ビテ肺紋理著明ナリ。

第 3 例、 當時 18 歳、マントウー(+)、診断、左側上葉播種性結核兼肋膜炎肥厚。

「レントゲン」所見、左側肺尖ヨリ中野ニ互リ無數ノ粟粒大斑點狀陰影アリ、下野ハ心臓ト胸壁ノ間ニ濃厚均等性陰影ヲ以テ覆ハル、右肺全面ニ血管影ノ交叉部結節狀ニ膨隆セル感アリ。

第 4 例、 當時 21 歳、マントウー(++)、診断、左側結節性結核(後肋膜炎性浸潤)。

「レントゲン」所見、左肺上半部ニ樹枝狀濃影アリ鎖骨下ニ於テ融合シ杏實大薄影ヲナシ肺尖ニテハ櫻實大ノ薄斑ヲナス、心臓左縁ニ接シテ鷺卵大ノ濃影アリ其ノ周邊部ハ網狀ヲ爲ス。

昭和 8 年 11 月 8 日、死亡。

第 5 例、 當時 21 歳、マントウー(++)、診断、左肺尖癥瘕性結核。

「レントゲン」所見、左側肺尖ニ限局シテ粟粒大結節集合シ約指頭大ノ陰影ヲ成ス、多少融合ノ傾アリ、鎖骨下ニ極メテ少數ノ粟粒大結節狀斑點アルモ餘リ明ナラズ、左側肺門甚々大且濃厚ニシテ周圍ニ索狀ニ放散ス。

第 6 例、 當時 18 歳、マントウー(++)、診断、左側上葉結節性結核。

「レントゲン」所見、(寫眞鮮明ヲ缺ク)左側鎖骨下及第一肋間ニ互リ拇指頭大並ニ指頭大ノ融合セル如キ濃厚陰影アリ、小斑點ヲ以テ濃厚ナル左肺門影ト連絡ス、昭和 4 年 9 月 4 日再檢、兩肺全般ニ互リ粟粒大斑點無數ニ見ラレ左肺ハ右肺ヨリ其ノ數多シ、兩側肺尖ニテハ融合シテ指頭大ノ濃影ヲ作り殊ニ左肺尖ニテハ其ノ中央ハ稍ニ透明トナル、左肺門大且濃ニシテ境界不鮮明ナリ。

昭和 5 年 8 月 31 日死亡。

第 7 例、 當時 17 歳、マントウー(++)、診断、兩側上葉結節性結核。

「レントゲン」所見、兩側、上野ニ粟粒大乃至「レンズ」豆大斑點ノ連鎖ヨリ成ル樹枝狀陰影アリ左側鎖骨下ニテハ多少融合シテ鷺豆大濃影ヲ成ス、左肺門稍々大且濃厚ナリ。

昭和 8 年 7 月 17 日死亡。

第 8 例、 當時 19 歳、マントウー(+)、診

断、兩側上葉播種性結核。

「レントゲン」所見、兩肺上野第二肋骨ヨリ上方ニ多數ノ粟粒大斑點ヲ見ル、左肺尖及鎖骨下ニ於テハ蠶豆大ノ不鮮明ノ濃斑ヲ成ス、左側肺門甚々シク腫大シ且濃厚ナリ。

昭和 8 年 9 月 10 日死亡。

第 9 例、 當時 22 歳、マントウー(++)、診断、兩側上野播種性結核。

「レントゲン」所見、左肺ハ上野並ニ中野ニ右肺ハ上野ニ於テ粟粒大結節狀陰影無數ニ存在ス融合ノ傾向ナシ、左側肺門杏實大ニ腫大シ濃厚ナリ。

第 10 例、 當時 17 歳、マントウー(++)、診断、兩側上葉播種性結核兼左肋膜炎灰化竈。

「レントゲン」所見、兩肺第三肋骨ヨリ上方ニ多數ノ粟粒大結節狀斑點アリ右肺尖ニ大豆大ノ濃影ヲ見ル、左肺下部胸壁ニ接シ細長橢圓形ノ境界銳利ナル極メテ濃厚ナル陰影アリ多少顆粒狀ニ見ユ。

昭和 5 年 8 月 31 日退學、同 6 年 6 月 6 日死亡。

其他ノ病竈、余等ハ第 1 回報告ニ於テ淋巴道性結核 3 名、初感染ト診断セシモノ 4 名、肺門周圍浸潤 3 名アリシヲ記載シテケリ、其ノ中不明 2 名ヲ除ク 6 名ニ付テ見ルニ死亡 1 名壯健 5 名ヲ得タリ。

「死亡」 1 名。

 當時 18 歳、マントウー(++)、診断、初感染群(兼粟粒結核疑診)。

「レントゲン」所見、左肺中野第三肋骨ノ上縁ニ當リ蠶豆大ノ濃影アリ左右ニ向ヒ延長ス、左肺門影腫瘍狀ニ腫大シ其ノ境界銳利ナリ、兩肺肺紋理著シク太ク結節狀影ヲ交ユ。

昭和 5 年 6 月 15 日腹膜炎ニテ死亡。

病氣退學者、今回ノ調査ニヨリテ檢診後病氣退學セシモノ 19 名ヲ算シ、中 4 名ハ死亡シ、殘余ノ 15 名ニ付テハ僅カニ 1 名(早期浸潤例)ガ回答ヲ送附シ來タリシモノ 14 名ハ居所不明ノ爲メ豫後ヲ知ル事能ハザルモノナリ、是等中途退學者ノ當時ノ病名ハ表ニ付テ明カナル如ク胸内淋巴腺腫脹 3 名、早期浸潤及續發症 6 名、血行性播種性結核 6 名ニシテ、就中注目ス可キハ早期空洞ノ 3 名ト血行性片側播種性ニテ進行性ノモノ 2 名(全部)及兩側性播種性結核 2 名ナリトス

今退學時期ト學校ニ就テ調査セルニ、19名中2名ハ不明(中1名死亡)、昭和4年(檢診ト同年)退學ハ4名(内1名ハ後死亡左肺尖早期浸潤)、

同5年中退學者ハ5名(内2名死亡シ血行性播種性即上記第6例及第10例)、同6年5名、同7年3名ナリ。

總括竝ニ考案

181名ノ胸内淋巴腺腫脹竝ニ肺内病變アリシモノ、4年8ヶ月後ノ豫後ハ上記ノ如シ、觀察期間短カキヲ以テ到底永久ノ豫後判定ト稱シ難キモ大體ニ於テ青年期(一部少年期ニ編入ス可キモノヲ含ム)早期結核ノ經過ヲ窺知スルコトヲ得タリト信ズ。

病氣退學ノ判明セルモノ15名(退學後死亡セルノヲ除キ)ヲ算セルハ壯健者ノ多キト共ニ其ノ數寧口割合ニ僅少ナルノ感アリ(8.3%)是等ハ何レモ檢診當時ハ自覺ノ症候無カリノモノナルモ檢診ノ結果ヲ家族又ハ常人ニ告グ適當ノ處置ヲ取ル可キコトヲ忠告セザルガ爲メ或ハ豫後不良ヲ懼レテ退學セルモノモアル可キモ、其ノ大多數ハ身體違和ヲ自覺シ實際就學不可能トナリシモノナルコト想像ニ難カラズ、早期浸潤及續發症6名中早期空洞3名ヲ算セルト血行性播種性結核ニシテ進行性傾向ヲ示セルモノ全部(2名)殊ニ兩側性播種性2名ノ如キ此レヲ證シテ餘リアリ、此等退學者ノ終局ノ豫後不明ナルハ遺憾トスルトコロナリ。

最モ注意スベキハ死亡數ト各型ニ對スル其ノ配列ナリトス。120例中22名(18%)ノ死亡數ハ驚嘆ス可キモノアリ、我邦ニ於テ余等ノ觀察ニ似タル文獻アルヲ知ラザルガ故ニ比較ヲ試ムル能ハズ。ミュンフバッハ(W. Münchbach)(1933年)ノ獨逸バーデン州地方保健所ニ於ケル9000名ノ患者ノ8ケ年間ノ觀察ニヨレバ第一期肺結核(ツールバン氏分類)ニテハ死亡率7.1%、第二期20.2%、第三期51.0%ナリト云フ。クレーブス(W. Krebs)(1930年)ノ瑞西アールガウ治療所入院肺結核患者ニ付テハ第一期患者492名中死亡12.6%ナリ、氏ハ觀察期間17ケ年ノ長時日ニ互レルモノナリ。バーンズ(H. L. Barnes)(1933年)モ療養所收容患者365名ニ付テ1ケ

年乃至14ケ年後ノ豫後ヲ觀察セルガ病竈ノ廣サ50「センチメートル」平方以下ノモノハ死亡率23%ニシテ増殖性結核ハ17%混合型ハ23%ニ當ルト云フ。グラス及ホート(H. Grass u. F. Hoth)(1932年)等ガ獨逸ブレーメン市結核相談所ニ於ケル1500名ノ4ケ年間ノ觀察ニテハ開放性結核ニテ、豫後良好ノ見込ノモノ、(第一期)死亡率9.6%豫後疑問ノモノ、死亡率27.7%、閉鎖性肺結核ニテハ豫後更ニ良好ニシテ豫後良好ノ見込者ニテハ僅カニ3.4%ニ過ギザリキト。米ノヘザリントン(H. W. Hetherington)(1933年)ハ青年期生徒ノ肺結核ニ付テ30—48ヶ月ノ間ニ3回ノ再検査ヲ行ヘルニ潜伏性肺尖結核8名中2名増悪、潜伏性小兒型浸潤13名中2名増悪氣管氣管枝淋巴腺内灰化112名中増悪ナシ云々等ヲ記載ス。ゾーパー及ウイルソン(Soper a. Wilson)(1932年)ノ米エール大學々生ノ結核檢診ニ於テハ1502名ノ被檢者中38名ハ肺結核ニテ退學セリト記ス。學生生徒ノ肺結核檢出ニ付テハ此外 Kattentidt, Kayser-Petersen Paul Krause, Riemer 等ノ報告アルモ余等ノ如ク其ノ後ノ經過又ハ豫後ニ付テ報ズルモノナシ。余等ノ死亡率ヲ上記 ミュンフバッハ、クレーブス グラス 等ノ死亡率ニ比スルハ當テ得タルモノニ非ズ此レ等ハ皆療養所入院患者ニ付テノ統計ナレバナリ、然ルニ數字上ニ於テハ余等ノ死亡率ガ是等患者ノ死亡率ヨリ遙カニ大ナルハ誠ニ遺憾ナルト同時ニ驚ク可キモノナリトス、而モ豫後一般ニ良好ト信ゼラル、胸内淋巴腺結核ニ於テモ4例ノ死亡者ヲ見タリ、是等ノ點ニ於テ吾邦青少年ノ結核ハ極メテ早期ニ診斷セラレ相當ノ治療ヲ加フ可ク勸告セラレタルモノニ於テモ豫後甚ダ不良ナリト言ハザル可カラザルニ至ル。

死亡者 22 名ノ病型分類ヲ第 1 表ニ付テ觀ルニ胸内淋巴腺腫脹 6.8% 早期浸潤及續發症 33% 血行性播種性結核 29.4% 等ナリ就中早期浸潤ニテ新鮮ナルモノ 7 名中 2 名早期空洞 3 名中 2 名血行性播種性結核片側ノモノ、中進行性 2 名全部死亡等ハ大ニ注目ス可キモノナリト考ヘラル。早期浸潤ガ肺癆ヘノ進展第一階梯トシテ豫後憂慮ス可キモノナルハレデケル (Redeker) 等ノ主張スルトコロニシテ我邦ニテハ熊谷教授等モ同意セルモノナリ、余等ノ場合ニ於テモ經過不明ナルモスク多數ノ死亡者ヲ見タルハ之レニ符合セルモノナリ。

血行性播種性肺結核ニ付テハ最近特ニ諸方面ノ關心ヲ惹起セリ、ウルリチ (Ulrici) ハ粟粒結核ノ外ニ反覆性遷延性播種結核ト一時性播種結核トガ豫後ニ多大ノ差異ヲ來スモノナルコト、後者ニハ進行性ノモノ、孤立性臟器結核及不全性血行性結核ヲ分チ其ノ豫後ニ於テハ不全性型ハ最も良好ナルモ反覆襲撃ニヨル再燃ヲ度外視スル能ハズト記セリ。慢性粟粒肺結核ガ自然治癒ヲナスモノ頻々トシテ報告セラル、(Max Cohn, Umber, Assmann, Lorey, Kern, Stievelmann etc.) 余等ノ例ニ於テ死亡セルモノ、類型配列ハ凡ソノ型ニ分布セラル、モ例數極メテ小ナルガ爲メ其ノ各型ニ付テ總括批判ヲ爲ス能ハズ、大體ニ於テ血行性播種性結核 34 例中ノ死亡率 29.4% ヲ早期浸潤及續發症ノソレ (33.3%) ニ比較スレバ多少ノ低率ナリト言ヒ得ルニ過ギザルナリ。

病氣中ノ記載ハ單ニ回答書ヲ案ジテ斯ク區分セルニ過ギズ、果シテ基本疾患ノ爲メニ病氣中ナルカ否カ不明ナルヲ以テ暫ク論外ニ置クヲ至當トセン。

健康不勝モ亦記載漫然タルガ故ニ批判ヲ避ク、

結 論

(1) 所謂健康中等學校生徒ノ「レ」線検査ニヨル結核 181 名中 120 名ニ付キ 4 年 8 ヶ月後ノ健康状態ヲ調査セリ。

而モ其ノ數僅カニ 6 例 (5%) ニ過ギズ。

是等ニ對シ「壯健」ニシテ日常生活ニ毫モ差支ナシト回答セルモノ 86 名 (約 72%) ノ多キニ及ベリ、其ノ中 51 名 (約 60%) ハ胸内淋巴腺又ハ肺門影腫脹ナリ、余等ハ第一報ニ於テ既ニ明記セル如ク非特殊性ト思考セラルモノモ此ノ中ニ包含セシメタルガ故ニ 4 年 8 ヶ月後全ク壯健ナルモノ此ノ部ニ屬スル者ニスクノ如ク多數ニ現ハル、モノナラント推定ス。此所ニ最モ興味アルハ早期浸潤及血行性播種性結核ガ共ニ半數ニ上ハ此ノ年月後ニ於テ自稱健康者トシテ生存スル事實ナリトス、早期浸潤ノ新鮮ナルモノ 7 名中 4 名、治癒傾向 7 名中 4 名共ニ健康者ノ部ニアリ其ノ中新鮮早期浸潤 1 名早期空洞 1 名ハ兵士トシテ滿洲ニ出征中ナリトノ回答ヲ得タリ、是等ハ恐ラク治癒セルモノナラト考ヘラル。又血行性播種結核ニ於テモ新鮮ト認メシモノハ片側竝ニ兩側共ニ 4 例中 3 例ハ壯健ナリ治癒傾向ノモノモ夫々 12 名中 8 名及 7 名中 4 名ハ壯健ナリト云フ、以テ血行性播種結核ガ豫後良好ナルコトヲ證スルニ足ル。

肺門周圍浸潤、淋巴道性結核、初感染等ハ 6 名中生存 5 名即チ 83.3% ニ及ベリ、即チ豫後ノ良好ナルコト恰モ胸内淋巴腺及肺門影腫脹ニ次ガモノナルコトヲ知ル。成人肺結核ノ進展及豫後ニ就テノ觀察或ハ統計ハ 1925 年 アスマン、レデケル、ロンベルグ、リュチン 等ノ鎖骨下浸潤又ハ早期浸潤ノ研究ト ブロイニング ノ肺尖結核ノ長期間觀察ニ啓發サレタルモ我邦ニ於ケル研究ハ未ダ指ヲ屈スルニ過ギズ、余等ノ本研究ハ肺所見ノ逐究ニ非ズシテ 5 ケ年ニ近キ年月後ノ現状報告ヲ基トシテ論ジタルモノナルモ、以テ極メテ早期ノ成人肺結核ノ豫後ヲ知ルニ足ルモノト信ズ。

(2)、壯健 86 名 (71.7%) 健康不勝及病氣中 12 名 (10%) 死亡 22 名 (18.3%)、病氣退學 15 名 (8.3%) ノ成績ヲ得タリ。

(3) 胸内淋巴腺腫脹及肺門影増大ハ豫後最モ良好(壯健 86.4%)ニシテ、死亡ハ4名ヲ出セリ。

早期浸潤及其續發症ハ豫後最モ不良ニシテ死亡 33.3%ニ上ル。

血行性播種性結核ノ死亡率ハ 29.4%ニ及ビ其

(本論文ノ要旨ハ昭和9年8月16日北海道醫學會第72回例會ニ於テ講演セリ)。

文 獻

- 1) 有馬英二, 血行性(播種性)肺結核. 東西醫學大觀. 第二卷. 第五十二號. 昭和七年.
- 2) 有馬英二, 血行性播種性肺結核. 診斷ト治療増刊. 昭和八年.
- 3) 有馬英二, 山田豐治, 青年期ノ肺結核ニ關スル研究. (第一報). 特ニ早期浸潤ニツイテノ觀察. 結核. 第十卷. 第五號. 昭和七年.
- 4) Barnes, H. L., The prognosis of noncavernous phthisis etc. Amer. Rev. Tbc. Vol. 28, No. 5. 1933.
- 5) Braeuning, H., Verlauf und Prognose derjenigen Lungentbk. usw. Ztschr. Tbk. Bd. 60, H. 4, 1931.
- 6) Braeuning, H. und Neisen, A., Die Prognose der offenen Lungentbk. usw. Tuberkulose-Bibliothek. Nr. 52. 1933.
- 7) Grass, H. und Hoth, F., Wie bewährt sich die Prognose in der Fürsorge. Beitr. Klin. Tbk. Bd. 81, H. 1, u. 2, 1932.
- 8) Hetherington, H. W., The significance of tuberculous lesions found in adolescent children in a school survey. Amer. Rev. Tbc. Vol. 28. No. 6, 1933.
- 9) Kattentidt, Tuberkulosefürsorge an den deutschen Hochschulen. Ztschr. Tbk. Bd. 52, H. 4, 1929.
- 10) Kattentidt, Das zweite Semester Röntgenreihendurchleuchtung an der Universität München. Ztschr. Tbk. Bd. 58, H. 4, 1930.
- 11) Kattentidt, Neue Ergebnisse der Münchener Studentenreihendurchleuchtung. Ztschr. Tbk. Bd. 62, H. 4, 1931.
- 12) Kayser-Petersen, Die offene Tbk. der Studenten usw. Beitr. Klin. Tbk. Bd. 72, S. 452, 1929.
- 13) Kayser-Petersen, Ergebnisse von Umgeb-

ung-und Reihenuntersuchungen auf Tbk. usw. Beitr. Klin. Tbk. Bd. 78, S. 140, 1931.

豫後ハ不良トイフベク、成人肺結核發生上早期浸潤ト共ニ重要ナル位置ヲ占ムルモノト考ヘラル。

(4) 青年期早期肺結核ノ豫後ハ一般ニ不良ニシテ 18.3%ノ死亡率ヲ示セリ。

- 14) Krause, P. und Gantenberg, R., Über den Wert Allgemeinuntersuchungen der neuimmatrikulierten Studierenden usw. Ztschr. Tbk. Bd. 65, H. 2, 1932.
- 15) Krebs, W., Die Fälle von Lungentuberkulose in der aargauischen Heilstätte Barmelwerde aus den Jahren 1912-1927. Beitr. Klin. Tbk. Bd. 74, S. 345, 1930.
- 16) Münchbach, W., Das Schicksal des lungentuberkulösen Erwachsenen. Tuberkulose-Bibliothek. Nr. 49, 1933.
- 17) Opie, Landis, Mc Phedran and Hetherington, Tuberculosis in public school children. Amer. Rev. Tbc. Vol. 20, p. 413, 1929.
- 18) Riemer, K., Fünf Semester Tätigkeit der Tuberkuloseuntersuchungsstelle der Studentenhilfe Hannover. Ztschr. Tbk. Bd. 65, H. 5, u. 6, 1932.
- 19) Sachs, W., Beiträge zur Frage der Heilbarkeit der miliaren Lungentuberkulose. Beitr. Klin. Tbk. Bd. 74, S. 309, 1930.
- 20) Soper, W. B. and Wilson, J. L., The detection of pulmonary tuberculosis in 3000 students entering Yale University. Amer. Rev. Tbc. Vol. 26, p. 548, 1932.
- 21) Ulrici, H., Die Haematogene Tuberkulose. Beitr. Klin. Tbk. Bd. 81, H. 1/2, 1932.
- 22) Wiewiorowski und Bödecker, Über den Röntgenkataster in der Tuberkulosebekämpfung. Fortschr. Röntgenstr. Bd. 43, S. 679, 1931.